

巻頭言

「会社を辞めたころの話」

理事長 新谷 友良

回顧談になってしまいますが、協会に入会したのが2002年なので今年で17年目になります。入会当時は現役の会社員で、定年までの3年間ぐらいいは仕事と協会活動とを並行してやっていました。物づくりの会社なので、聴覚障害者も多くおり、当時としては比較的障害者配慮に気を配っている会社でした。そのせいか、東京都の中途失聴・難聴者手話講習会の助手を務めた2年間は就業時間内でしたが、会社が時間刻みのボランティア休暇を認めてくれました。

その当時は定年延長が話題になり始めたころで、定年間近に会社の制度が変わり、2年間定年が延長されました。延長された2年間は会社勤務を継続してもよく、また新しい仕事やキャリア開発のための休暇（セカンドキャリア開発休暇と言っていました）を取得することもできる仕組みでした。手話講習会の助手をやるのでボランティア休暇を取ったのが、会社の人事の目に留まっていたようで、わざわざ担当の役員が「セカンドキャリア開発休暇を利用されませんか？」と言ってきました。少し迷いましたが、2005年10月からこの制度を使って休暇に入りました。おそらく制度利用の第1号だったと思います。

新聞報道によると、働き方改革の一環として、企業が副業を解禁する動きが広がり、大手企業の約5割が従業員の副業を認めているそうです。フレックスタイムや在宅勤務、フリーアドレスなど10年前には想像がつかなかった勤務の多様化が進んでいます。わたしが利用した「セカンドキャリア開発休暇」では、「本業か副業か」の選択が必要でしたが、今進んでいる働き方の変化は「本業も副業も」を指向しているようで、副業で蓄えたスキルを本業で活用することを企業は期待していると記事は書いています。

以前は、就労期間は30～40年というイメージでしたが、今は40～50年ぐらいでしょうか？ 人生の大変多くの時間を人は働いて過ごしていきます。その時間の中で、それぞれの人が本業だけではなく、それ以外の活動を見出していくことは、本業の充実と同じように切実な課題のように思えます。たまたま、わたしは聞こえなくなってこのことを考えましたが、早くから自覚的に取り組めば、本人にとっても社会にとっても、本業と副業を併せ持つことは、意味のある結果を生み出す一つの生き方のように思えます。